

小学校教員養成における音楽科の授業動画制作で培われる資質・能力 新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う遠隔授業での附属小との連携による試み

著者	小畑 千尋, 三浦 秋司
雑誌名	宮城教育大学紀要
巻	55
ページ	161-171
発行年	2021-01-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00001145/

小学校教員養成における音楽科の授業動画制作で培われる資質・能力

—新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う遠隔授業での附属小との連携による試み—

*小 畑 千 尋 **三 浦 秋 司

Competence Cultivated by Lesson Video Production for
Department of Music in Elementary School Teacher Education:
An Attempt based on Cooperation with a University Attached Elementary School
for Remote Lessons Accompanied by Prevention of the Spread of the Novel Coronavirus

OBATA Chihiro and MIURA Shuji

要 旨

新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い、遠隔で実施した小学校教員養成課程の授業「音楽科教育法（初等）」に於いて、本学附属小で制作された授業動画及び、その制作過程を参考にしながら、音楽科の授業動画制作を実施した。学生らが制作した授業動画及び感想の分析を行った結果、①対面時以上に、児童の反応を想像しながら授業を組み立てている、②動画撮影することにより、授業者である自分自身を客観的に捉えている、③対面でも遠隔でも必要な内容について、ICT を中心としたツールを駆使することにより、対面時と同等、それ以上の効果的な授業場面をつくっている、④遠隔で複数名で制作することにより、班員とのコミュニケーションの取り方を意識化できている、⑤学校休業時における遠隔授業を、自分事として考えられるようになった、などの将来教員として必要な資質・能力に繋がる要素がみられた。

Key words : 授業動画制作、小学校教員養成、遠隔授業、附属小学校、音楽科

1 はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大により、2020年4月から、国内の多くの大学は対面授業を実施することが困難な状況となった。文部科学省が全国の国公私立大学、高等専門学校1066校に実施した調査によると、2020年6月1日時点で遠隔授業のみ実施している大学等が60.1%、対面（面接）授業と遠隔授業が併用されている大学等は30.2%、合わせて9割以上が遠隔授業を実施している（文部科学省 2020a）。また、朝日新聞社と河合塾が全国の国公私立大学を対象に行った調査では、2020年7月上旬時、全授業の8割以上を遠隔で行っている大学が、全体の約7割を占めたことが明らか

となっている（朝日新聞社・河合塾 2020）。

宮城教育大学では4月は休校、5月の連休明けから、当分の間遠隔授業を実施することとなった。筆者は遠隔授業の経験が皆無だけでなく、ICT 機器の扱いが決して得意とはいえない。それゆえ、この状況下で学生たちの学びを保障するために、大学の推奨する Google Forms, Google Classroom, Google Drive, Google Meet, YouTube 等をどのように紐づけたらよいのか、さらに、遠隔授業で出来ること、出来ないことを確認するための試行錯誤に多くの時間を要した^{注1)}。

遠隔授業の実施方法を模索するうちに、対面授業の内容をそのまま遠隔授業に置き換えて実施するという発想自体に無理があることに気づいた。対面授業を前

* 音楽教育講座

** 宮城教育大学附属小学校

提とした活動を基に授業内容を考えてしまうと、合唱ができない、リコーダーも吹けないなど、不可能なことばかりとなってしまう。

しかし一方で、遠隔授業だからこその良さもある。たとえば、YouTube に動画をアップロードすれば、繰り返し視聴でき、各自のペースで進めることが可能となる。また Zoom のブレイクアウトルーム機能を使えば、教室内のグループディスカッションのような周囲の話し声がなく、対話に集中できる。

筆者が担当する「音楽科教育法(初等)」は、小学校教員養成の必修授業であり、例年1クラス約50～80名ほどの学生が履修する。その学生らが一斉に歌うことはおろか、教室内でいわゆる三密状態を回避することは難しく、もし新型コロナウイルスの感染状況に応じて、段階的に対面授業を再開する時期がきたとしても、本授業をすぐに対面授業で実施することは厳しいことが容易に予想できた。例年の対面での本授業では、複数名による班ごとで授業開発を行い、授業者以外の学生が児童になりきっての模擬授業を行っていたが、この状況下で実施することは不可能となった。

すなわち、このコロナ禍で筆者が求められているのは、「遠隔授業で使えるツールを最大限に活用しながら、学生らが、将来小学校教員として音楽の授業を行うために必要な資質・能力を身につけるための内容を保障する」という発想の転換であった。

一方、宮城教育大学附属小学校(以下、附属小と略記)では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための休業期間中の4月半ばから、教員が授業動画を制作し、ほぼ毎日それらを児童に向けて配信した。全国的に紙媒体を中心に対応していた小学校が多い中、かなり先駆的な試みといえよう^{注2)}。

しかも附属小の授業動画は、学習活動が停滞しないためというだけでなく、たとえば、入学式すら執り行われていない1年生には、教員の自己紹介や学校案内であったり、児童の運動不足を解消するために、体育部の教員がオリジナルの体操を考え、全教員が参加した動画であったり、教員らの児童に対しての教育的配慮に満ちた動画であった。

筆者が担当する「音楽科教育法(初等)」の履修者は、学部2年生が中心であり、3年次には附属小での教育実習を経験する。コロナ禍で、自分たちの実習校である附属小の教員らがどのような取り組みをしてい

るのかを知ること、この状況下で児童の学びを止めないために方法を模索している柔軟な発想力に触れることは、学生らにとって、まさに今だからできる学びであろう。また、休業期間中の子どもたちに、どのような学びを提供できるのかを考え、可能な方法を自ら探索することは、教員になるために欠かせない資質・能力の育成に繋がると考える。さらに、GIGA スクール構想が前倒しされ、急速な環境整備が進む現在、ICT を効果的に使いこなせる教員の育成も必須である。

そこで、本授業では、附属小教員によって制作された授業動画及び、その制作過程を参考にしながら、4名から6名の班ごとの遠隔による音楽科の授業動画制作を最終課題とすることにした。

本稿では、対面授業での授業開発及び模擬授業ではなく、遠隔授業における音楽科の授業動画制作において、学生たちが教員になるための資質・能力の育成に結びつくためのどのような学びを得たのか、学生らが制作した授業動画及び感想の分析を通して明らかにすることを目的とする。

2 臨時休業期間における附属小の取り組み

臨時休業期間中における附属小の取り組みについて、特に授業動画配信を中心に表1^{注3)}にまとめた。

2020年2月27日、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、政府から一斉休業の要請があり、翌週3月2日から、附属小は臨時休業となった。その後、臨時休業期間が何度も延長され、全学年登校が再開されたのは6月2日である。

授業動画配信に関しては、4月13日の段階で遠隔授業の実施を検討、2日後の15日から授業動画の制作を開始した。附属小教員らで共有した動画による授業づくりの基本的な考え方は、以下の通りである。

- 普段の本校の授業(45分で1時間)をベースとする(但し1動画の長さは、10分以内を目安とする)。
- 発問や板書など、日頃大事にしている手立てを変わらず大事にする。
- ノートを活用し、子供の学習の記録が残るようにする。
- 対面授業時から実施していた「本質に迫る授業」の実現を通して、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を目指す。

そして、4月23日に授業動画の配信「I期(4月23

表1 附属小の休業期間中における
授業動画配信を中心とした取り組み

2020年 2月27日	【内閣総理大臣の臨時休業要請】
3月2日	【臨時休業開始】
4月6日	Google Meet の操作確認
4月13日	遠隔授業の実施の検討を開始
4月14日	研究部会にて遠隔授業の実施の詳細を検討 (骨子決定)
4月15日	動画配信による授業の実施を決定、授業づくり開始
4月23日	Google Drive を活用した動画配信による授業【Ⅰ期】(4.23～5.1) 開始 アクセスの集中により配信を中断、原因・改善策の調査
4月24日	動画配信の方法の変更を決定(YouTube の 限定公開、URL の秘匿) YouTube の活用による方法で動画配信による授業再開
5月1日	研究部会にて遠隔授業の改善策を検討 Google Forms を活用した遠隔授業の家庭向けアンケート実施
5月8日	遠隔授業の家庭向けアンケート集計結果配信
5月13日	YouTube を活用した動画配信による授業【Ⅱ期】(5.13～5.29) 開始 授業動画サイト「MAES 授業動画」の開設(週 予定・授業動画・資料・振り返り・フィード バックの一括管理・提示) Google Forms を活用した学習の振り返りの 集約開始、児童用 Google アカウントの取得 に向けた作業を開始
5月14日	【宮城県の緊急事態宣言解除】児童用 Google アカウントの配付、家庭での端末の準備・ 設定
5月22日	Google Meet を活用した双方向コミュニケーション試行的実施
6月1日	学校再開
6月2日	全学年登校

日～5月1日)」を開始した。Ⅰ期では、1日に3または4授業(教科は国語・社会・算数・理科・生活科に限定)、1年生向けのスタート・カリキュラム授業を実施した。同時に通信環境や受信機器が備わっていない家庭へのサポートとしてDVDの貸出も開始した。

その後、Google Forms を活用した遠隔授業の家庭向けアンケートを実施し、子どもの取り組みや家庭の通信回線の状況の把握、今後の改善策などの検討を行った上で、授業動画の配信「Ⅱ期(5月13日～5月29日)」を開始した。

Ⅱ期においては、教科の枠を広げ(音楽科も含む)、全校音楽(歌唱)、全校体育(運動)、朝会など、授業以外の教育活動に関する動画の制作・配信も追加された。子供の振り返りについては、授業で使ったノートを登校日に回収し、子どもの取り組みを担当が確認することに加えて、Google Forms を用いて子どもの感想や質問を集約した。それに対して教員は、ブログや電話を活用したフィードバックも行った。また、DVD と共に、端末(iPad)の貸出を開始した。Ⅱ期の動画配信は、学校再開の前週まで継続された。

さらに、対面授業の再開準備と並行しながら、今後の新型コロナウイルスの拡大状況により、再び休業にせざるをえなくなった際の対策も行っている。たとえば、表1に示したとおり、大学との連携で各児童に1アカウントずつ配布し、Google Meet を活用した双方向コミュニケーションの試行を5月末に行っている。

3 本授業での小学校音楽科の授業動画制作の概要

本年度前期「音楽科教育法(初等)」の履修者は、小学校教員養成課程(教育学、特別支援教育を専門とするコースの学生)の学部2年生が45名、中等教員養成課程に所属し、副免許として小学校教員免許を取得予定の2～4年生5名、計50名であった。

「音楽科教育法(初等)」における、授業動画制作の過程を表2に示す。なお、授業では、音楽科教育の歴史、歌唱の発達と「音痴」克服、対話型鑑賞を用いた音楽科の授業実践、その他の内容も扱ったが、ここでは割愛する。

遠隔授業を実施するにあたり、対面授業と比較して、言語・非言語コミュニケーションの情報量が著しく減少することが懸念された。そこで、①Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いて、当日の授業内容に関して、基本的には毎回異なるメンバーでのディスカッションを行う、②グループの代表者が主な意見を紹介し、クラス全体で共有する、③さらに、授業の最後にその日の課題や感想などを、各自がGoogle Forms から記入する、④③のコメントについては、次週の冒頭で筆者が学生全員に紹介しながら、学生の質問に答え、随時筆者の感想や追加情報などを伝えることを、毎時間行った。

表2 本授業での音楽科授業動画制作の過程

2020年 6月8日	附属小授業動画視聴とそれに関するディスカッション
6月15日	学生の感想に対する附属小教員からのフィードバック
6月22日	授業内容の検討、制作の方法等についての説明と班ごとのディスカッション
6月29日	仙台教育事務所指導主事による、コロナ禍での活動も含めた音楽科の現状についての講義
(7月1日)	附属小オンラインによる教員対象研修会「子どもの学びを止めない」(希望学生が参加)
7月6日	附属小研修会に参加しての感想の共有、各班で制作作業
7月13日	中間発表：各班によるプレゼンと感想の共有
7月20日	各班で制作作業
(7月24日)	授業動画提出〆切
7月27日	全級の授業動画の視聴、附属小教員による講評とディスカッション(自己・他者評価)

3.1 附属小授業動画の視聴

5月27日、本授業受講学生の動画視聴の方法について、附属小と協議を行った^{注4)}。学生が視聴する授業動画は、以下の5本にすることとした。

- 「附属小エクサティブ」

配信日：5月19日

動画の長さ：4分40秒

概要：全校児童を対象に、休業期間中に附属小体育部の教員らが考案したオリジナルの体操。宮城県を拠点に活動する音楽グループの曲にのせて、附属小教員総出演で体操を行っている。撮影にはドローンも用いた。

- 「自己紹介」

配信日：4月23日

動画の長さ：8分22秒

概要：対象は1学年。1学年担任教員らが初期に制作した動画。会うことのできない児童らに対して、教員が自己紹介をしながら、ゆっくりと語り掛けている。

- 「音楽：楽しく歌おう」

配信日：5月14日

動画の長さ：11分59秒

概要：1学年を対象に1学年担任教員が制作した。

動画中で用いている《おなかの体操》は、附属小の児童が、毎日朝の会で歌っている発声練習の歌である。1学年の担任教員全員で《セブン ステップス》をリズムカルに踊りながら、歌う。

- 「音楽：動きながら楽しく歌おう」

配信日：5月25日

動画の長さ：9分8秒

概要：1学年を対象に1学年担任教員らが制作、出演している。《おなかの体操》《おつかいありさん》に加え、《チェツ チェツ コリ》では、歌いながらの身体表現を行うが、徐々に音楽のテンポが速くなったり、動作が複雑になったりと、段階的に動きが難しくなる。

- 「楽しく絵をかこう」

配信日：5月14日

動画の長さ：①9分56秒、②3分24秒

概要：2学年の図工担当教員が制作した「デッサン」を扱った授業。導入にミケランジェロの絵を用いるなど、デッサンの世界に引き込まれる。説明の際に手元を拡大して撮影するなど、カメラのアングル等にも工夫がなされ、児童がひとりで自宅にある素材を用いて描ける工夫が随所になされている。

6月8日、受講学生らは、臨時休業期間における取組一覧(宮城教育大学附属小学校 2020a)、附属小の授業動画制作の過程をまとめた「動画配信による授業の実施フローチャート」(宮城教育大学附属小学校 2020b)の資料を参照しながら、上記の授業動画を各自視聴した。その後、本授業内でグループディスカッションを行った。

全学生がGoogle Formsから記入した視聴後の感想は、附属小と共有した。身近な附属小の教員らが、果敢に取り組む姿への感動や尊敬の気持ちを記す感想が多くみられた。学生の質問、感想に対しての附属小教員からのコメントは、翌週6月15日の授業冒頭で学生らに伝えた。

3.2 音楽科の授業動画制作に向けて

6月22日の講義において、授業動画制作の方法についての説明を行った。概要は以下のとおりである。

- 1) 附属小の授業動画及び制作に関連する資料を参考に
にする(附属小の授業動画については、YouTube

で常に視聴できる状態にした)。

- 2) 題材は、①1学年の「せんりつでよびかけあおう」から《やまびこごっこ》、②2学年の「せいかつの中にある音を楽しもう」、③3学年の歌唱共通教材《うさぎ》、④その他(特別な配慮を必要とする児童への音楽科の授業、音楽科と他教科との教科横断的内容など)から選ぶ^{注5)}。

- 3) 指導案(略案)を作成する。ワークシートなどの資料を作成し、添付することも可能。

- 4) 動画について

- 動画の長さは7～10分にする。
- 大学キャンパスへの入構が禁止されている状況を鑑み、班員が集まって打ち合わせ、撮影などは行わず、遠隔でのやり取りで進める^{注6)}。
- 動画には字幕もしくは、それと同等以上の情報保障を工夫する^{注7)}。

4 遠隔で学生が制作した音楽科の授業動画

班ごとに制作された授業動画10本については、全受講生と附属小教員が視聴した。7月28日の授業では、授業を視聴しての感想を共有し、動画を視聴した附属小教員もオンライン授業に参加し、視聴しての講評を学生たちに伝える機会を持った。

各班が制作した授業動画の中から、ここでは、2本の授業動画について、班員が制作した学習指導案(略案)を基に紹介する。

4.1 A班「身体表現を通して音楽を楽しもう」

対象学年：知的障害のある小学3・4学年

題材の目標：

- 教員と一緒に音楽活動をする楽しさを感じる。
- 音楽表現を楽しむために必要な身体表現の技能を身につける。
- 障害による筋緊張、発音の不明瞭さ等個々の苦手部分の改善・克服や、自分のできる範囲を理解する(自分理解)。(自立活動と合わせた指導)

本時(4時間構成の第4時)のねらい：

- 《とんくるりん ぱんくるりん》を用いて、歌と身体表現を行い、映像の中の教員らと合わせられるようになる。
- 自分のできる動きを自分で理解し(自分理解)、そ

の動きを実際にやってみる(筋緊張緩和と身体表現技能の習得)。

- 音楽を楽しみながら身体表現ができるようになる。

制作した動画の長さ：7分00秒

動画制作で使用したICT機器：スマートフォン(iPhone)

動画制作で使用したソフト・アプリ：VLLO、

MIXCHANNEL、PicPlayPost

字幕作成に用いたアプリ、サイト等：VLLO

授業動画の概要：発達障害教育コースの学生5名が自身の専門性を活かして制作した動画である。各活動における音源は、5名が各自で歌いながら踊り、ビデオ撮影したものを編集した《とんくるりん ぱんくるりん》を用いている(図1参照)。教員の動きを一例として示し、最終的には各児童が歌いながら、自分の身体表現を行うことを目的としている。

A班が作成した指導案(略案)からは、たとえば、「言語性短期記憶のある児童に配慮しながら、視覚的にわかりやすいように題材名をタブレットで示す」、「動くものに目が行くことを利用して編集で動きもあるものを使う。身振り手振りや朗らかな表情を通して子どもたちの興味を画面に向かせる」、「簡単バージョンの身体の動きの復習(座りながら)」、「難しいバージョンの身体の動きの復習」(図3参照)の活動では、「視聴する児童が一つの画面に集中できるように一人の先生を映す」など、動画全体を通して、視聴する児童への配慮がなされている。

また、「児童がこの動画を見てやりたい動きを見つけてくれることを重視するなど、一人ずつ見る際には巻き戻してみるように保護者などに伝えておく(オンデマンド方式を活用する)。対面授業であれば、子どもたちの動きに先生側が合わせることをしたい。今



図1 5名で踊りながら歌う



図2 座って歌いながら踊る

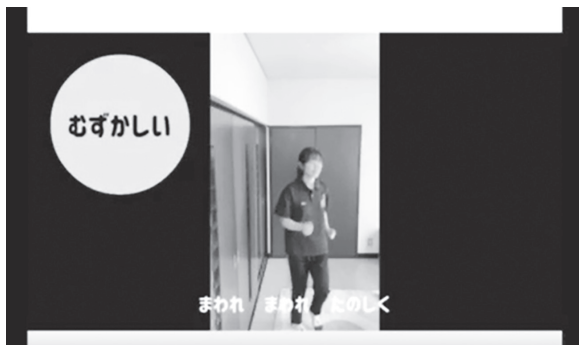


図3 全身を使って歌いながら踊る

回はオンデマンドでそれができないため、配慮として様々な動きを児童に提示し、その中から児童が選んで自分の身体表現ができるようにした」など、対面授業での活用も念頭に置きつつ、授業動画を制作していることが分かる。

さらに、保護者の協力を得て動画を送信してもらう設定にしており、その理由として、「①先生が児童の様子を確認するため、②学校再開後の朝の会に活用するための材料とするため（後々の復習につかう）」と記している。

4.2 B班「せいかつの中にある音を楽しもう」

対象学年：小学2学年

題材の目標：身の回りにあふれている音の存在を認知し、表現できるようになる

本時（3時間構成の第2時）のねらい：表現の多様性への理解や想像力を活かして、自身を表現できるようになる

制作した動画の長さ：9分00秒

動画制作で使用したICT機器：パソコン（Windows）、スマートフォン（iPhone）

動画制作で使用したソフト・アプリ：iMovie、

PicPiayPost、Phonto

字幕作成に用いたアプリ、サイト等：YouTube

授業動画の概要：5名で制作された本授業動画は、遠隔で撮影されたにもかかわらず、2名が対話しているように編集されている（図4参照）。また、「ペットボトルに音を集める」という想定で、ペットボトルをバトンとしてタイムワープしているかのごとく演出がされ、テンポよく授業が展開する。

それぞれの教員が、家の中の音を探す場面では、視聴している児童と一緒に音を探す感覚が持てるアングルで撮影された（図5参照）。その際、生活音（例えば炊飯器の蓋を閉める音）を聴かせた直後に「カチャ」などの擬音を発するという一連の動きが、動画を視聴していてストレスなく、聴取と表現の活動がスムーズに繋がっている。「『上手く表現できなかった、忘れちゃったっていう人は動画を止めてもう一度確認してみよう』と声かけをして、自発的な学習を促す」、「教員が提示する例を参考に、これから自分が声で表現する題材を決定」する活動では「児童が理解しているかいないか随時確認していくことが難しいため、場面例をいくつか提示する」など、動画を視聴している児童の認識に目が向けられている。

「順序を提示してその通りに進めることで完成に導くワークシート」の作成、活用も行っている（図6参照）。ワークシートは、「絵で表すことを対面授業での発表活動と置き換える」ことを意識したものであり、「友達や家族に発表してどの場面か当ててもらおう」と書き添えてあり、家庭内で共有することも想定している。さらに「第1時の復習かつ発展の役割を担い、また、第3時（最終時間）でのまとめ（動画制作）の発表原稿」となることも目的であり、実際に Google Forms の提出フォーム（図7参照）を作成し、「スキャンや画像で教員に送ることが可能であれば実行し、次回の授業で共有する」設定とした。

[illegible]

せいしかつの中にある音を楽しもう②

つくしたコマまんがのしゃんをとって、このフォームにいでいせつしましょう！
みんながつったすてきなコマまんがをおくってね！

※画像の例：「名前の入力はおらがなくても済ませてもかまいません。お手紙のワークシート③」にある4コマ漫画の写真を送り、「ファイルを追加」より画像をアップロードして、「送信」をクリックしてください。

ファイルをアップロードしてこのフォームを送信すると、Google アカウントに連携付けられている名前、ユーザー名、写真が表示されます。[@gmail.com](#) が正しいアカウントでない場合は、アカウントを選択してください。

*必須

なまえ *

図説も入力

4コマまんが *

- 1. ファイルを追加

表3. 音楽科の授業動画を制作しての感想 *文頭のアルファベットは班を示す。太字は筆者による。

<p>[A1] 最初にこの課題を聞いたとき、私たちができるのだろうかという不安が強かった。(中略) YouTube で聞いた音源を基に高校で培った相対音感を活用してピアノ伴奏をなんとか撮影し、ほかの人にもそれを基に歌ってもらうことで音源を完成させることができた。テンポを合わせながら歌う難しさがある中でメンバーがうまく撮影してくれてとても感謝している。障害を持つ子供たちはどうしても興味がないと見てくれないかもしれない。それについては私たちが楽し気に行うことで気を引けないかという案があった。(中略)自分で自分の撮影した映像を見たときに、思っているほど表現ができておらず楽しさを感じなく繰り返し撮影し直した。その点で伝えたいことは大げさに、児童になりきるくらいの勢いで話したり動いたりすることが大切であると学ぶことができた。さらに仲間との情報共有というのはとても大切であると感じた。立って撮るのか座って撮るのか、イヤホンをつけるとか、工夫点もうまく共有できていなければもったいない結果になる。(中略)自分が頑張るすぎるのではなく、ある程度周りの友人・仲間を信じて任せることも必要なことだと感じた。自分だったらできなかったであろうことをその人はいとも簡単に行うかもしれない。その人の得意や不得意を考慮しながらお願いをすることで「みんなで作り上げた授業」である意識を持つことができると思った。(中略)授業のアイデアというのは日常のいたるところにあるのだなと感じた。他のグループの授業を見て感じたこともあるが、日常にあるものを一つ工夫することでそれが最高に面白いものになるかもしれないという意識をもって周りを見ることがとても大切だと学んだ。自分たちが企画した動画が徐々に形になってほかの人に楽しんでもらえる、評価してもらうことはとても素晴らしい経験となった。(後略)</p>
<p>[A2] 授業を作るのが初めてで、さらに遠隔での授業というのは未知であり、作れるのか不安な部分がありました。しかし、学習指導要領を基にグループで話していくうちに指導したい内容が決まり、楽しんで授業を制作することができました。対面の授業ではできない複数人での制作は、多くの考えが出て、児童にとってより良い授業を作り出すことができると思いました。特別な支援を必要とする子どもへの授業を考えた時に、どのくらい自由度を高くするかが重要であると学びました。自由すぎても考えが思いつかない子や真似をすることも筋緊張でなかなか動かしにくい子もいます。遠隔で授業する場合、児童の様子が見られないので、声掛けや動作がとても大事になることが分かりました。遠隔授業では対面していない分、分かりやすいような工夫を沢山考えましたが、これは対面授業であっても同じことだと感じました。(後略)</p>
<p>[A3] 私はまだ模擬授業や授業づくりを一切やったことが無い状況で、初めてオンラインで授業動画の作成をしました。最初は作ることができるのか不安でしたが、グループでの話し合いを進める中でみんなで意見を出し合い、少しずつ形が出来上がり、まだまだ一人ではできないことでもみんなで協力すれば形になるのだと感じました。(後略)</p>
<p>[A4] 私の班は、知的障害を持つ子供に対してオンライン授業という環境の中でどのような授業を行えるか考えました。オンラインならではの音楽の授業ということで、様々なアイデアをみんなで出し合いました。自分の中で考えていたものをみんなに伝えるとみんながより良いものにしてくれて、自分の考えの幅が広がりました。授業動画では編集と出演をやりました。(中略)対象が知的障害児だったので、知的障害児に対する情報保障や分かりやすさを意識したのですが、結果的には誰にでもわかりやすく編集できたと思いました。合理的な配慮を音楽の授業動画の中で盛り込めたと思います。動画出演をしてみて、自分がにこやかに話していると思っても、動画を見ていると固かったり、笑顔が足りなかったりと自分が思っていた表現の仕方ができていなかったと気付きました。これもオンライン授業での動画作成だったからこそ気付けたことだと感じました。</p>
<p>[A5] (前略)短い時間の中で、内容をどうまとめればよいのか、詰め込み過ぎず程よいボリュームにするのがとても難しいなと思いました。オンラインだと双方向になりにくく、教員側からは子どもの取り組みの様子が見えないため、動画の中で子どもが考える時間を取ったり、動画を一度停止するという声掛けをしてみたりしてもよかったなと思いました。子供たちの実態に合わせて授業を進める姿勢、子どもに寄り添う姿勢が大切だと感じました。また、動画を撮影しているときに、自分では楽しくやっているつもりでも、録画した動画を見たらあまり楽しそうに見えず、動きも小さかったので何回も撮り直しをしました。客観的に自分が話したり、歌ったりしている姿を見ることができ、オンラインでは特に、自分が思っている以上にオーバーな感じで動いたほうがいいのだと気が付きました。また、グループで作成したため、それぞれの得意分野を生かし、効率的に作成を進めることができました。このことから、教員も一人だけで頑張るのではなく、みんなでアイデアを出し合い、協力することの大切さを学びました。また、他の班の動画を見ても学んだことがたくさんありました。オンライン授業では、教員の顔が見えることで子どもたちの安心感につながると感じました。(中略)普段は動画を視聴する側なので、制作する側の体験もすることができて良かったです。今回の反省や振り返りを踏まえ、もう一度授業動画を作成したいと思ったし、この経験は必ずほかの教科や将来教員になった時の授業にも生きてくると感じました。(後略)</p>
<p>[B1] いかに反応を見れない子どもの存在を意識して動画が作成できるか考えるのが何よりも難しかった。はじめは進行役の掛け合いも、ペットボトルもフォームも考えてはならず、淡々と音探しをする授業になると思っていたが、話し合いを重ねるうちに「オンラインでも気分は教室みたいな動画」を軸に制作したいという気持ちが生まれていき、追加でアイデアが生まれていった。まだまだ未熟ではあるが、オンラインの特性を充分に取り入れた学び多き動画が制作できたのではないかと感じている。昔から度々やってきた動画編集のスキルを大いに生かしたので良かったです！</p>
<p>[B2] (前略)今回制作した授業動画は、何度か子どもたちに呼びかける場面を作りましたが、実際に自分がカメラの前で「みなさんできましたか?」と話してみると、ここに子どもたちがいたら反応を確かめながら不安を解消していけるのになと思いました。また、自分たちでいちから授業を作ったのは初めてだったので、言葉の選び方や話し方の工夫が難しかったです。特に私は今回進行役に挑戦したのですが、完成した動画を見てみると少し声が小さかったりモゴモゴしたりしたところがあったので、そこがとても悔しいです。子どもたちが目の前にいることを想定しながらもっとハキハキと話せたら良かったと感じました。一連の授業作りを通して、今回初めて実際に子どもたちに話す際の注意点やワークシートを使うタイミングの難しさ、また映像授業ならではの工夫点について学ぶことができました。他のグループの動画からも、自分では考えつかなかった進め方や動画の使い方に気づき、とても興味深かったです。</p>
<p>[B3] オンラインのみだと話し合いの中でタイムラグや時間の制約などがあり、内容や意見を随時確認するが、やはり解釈に差が生じやすいと感じた。しかし、だからこそどうしたら相手の伝わるかをじっくりと考えることができたように思う。また、どんどん完成に近づくのが動画として目に見えて分かるため、対面とは違う達成感があった。授業制作自体に関して主に指導計画を担当したのだが、寝ずに試行錯誤するほどはつきり言って苦戦した。「これは対面の要素が強すぎてオンライン授業として成り立たない」「第1時の授業が第3時につながらない」など、様々な思考がぐるぐるとした。これを実際はどのくらいの時間で制作しているのか気になる。また、自分が主に指導計画を考えたこともあり、最も授業のイメージができていていくのがさすがだと思った。</p>
<p>[B4] オンラインだからこそのできることや、オンラインだからこそ伝わりにくいことについて考えることができた。どれだけ、見てる人を飽きさせないためには、声色やテンションに気をつけ、授業の展開も分かりやすくする必要があったと感じた。</p>
<p>[B5] 私は授業を作ること自体初めてだったので不安があったけれど班の人が協力的で本当に良かったと思いました。個人的には自分の家で動画をとるということに少し抵抗があったけれど、これからはスタンダードになっていくのだろうと思いました。(中略)大切なのは取り組む姿勢だということを強く学びました。(後略)</p>

2) 本授業の最終回に、「本授業はすべて遠隔（オンライン、オンデマンド）で行われました。現在のあなた自身の率直な感想に一番近いものはどれですか？ 1つ選んで下さい」という質問を、Google Formsを用いて受講者全員に行ったところ、有効回答48名中（受講者50名）、「遠隔授業の方が自分にとっては良かったと思う」が22.9%（11名）、「遠隔授業でも良いかなと思う」が64.6%（31名）、「対面授業の方が自分にとっては良かったと思う」が10.4%（5名）、「その他」が2.0%（1名：「遠隔授業にも対面授業にも良さがあるのでどちらでもよい」）という結果となった。

5 考 察

学生が制作した授業動画には、附属小の授業動画の視聴が大きく影響していると考えられる。たとえば、附属小の動画による授業づくりの基本的な考え方、附属小の授業動画にみられた特徴（通常の授業でも活用できる内容となっている、画面の前の子どもたちに話しかけ、子どもが返答する間を取る、学年全員の教員が全員で歌う・身体表現をする、焦点を当てて見ている場面を拡大して撮影する他）は、本稿で対象とした2つの動画にも多々活かされている。また、附属小の授業動画視聴後の感想では、教員の表情、動作について着目した感想も多くみられたのだが、そのモデルを視聴していたことが、自身の動画を見たときに（意識的であれ、無意識的であれ）、自身の表現に着目することに繋がりやすかったと考えられる。さらに、動画制作後、附属小の教員に自身が制作した動画について評価してもらったことで、授業づくりに必要な要素や、動画を視聴する子どもたちの取り組みのイメージ化について、考えを深めることに繋がった。

以下に、学生が制作した音楽科の授業動画及び感想からみえる、本課題の遂行を通して得た学び、ひいては将来教員として必要な資質・能力に繋がると考えられる要素を挙げる。

第一に、児童が視聴することを想定し、児童の反応を想像しながら授業を組み立てていることである。オンデマンドの動画による授業では、対面授業のような児童の瞬時の反応は一切ない。カメラに向かって話しかけても、児童の反応がない中で展開していくことの難しさを、学生たちも実感している。しかしながら、

筆者が昨年度までの対面授業で実施してきた、班ごとによる授業開発及び模擬授業と比較すると、例年と同様、もしくはそれ以上に、児童の認識に着目して授業が構成されている。

対面での模擬授業での難しさとして、まだ教育実習を経験していない学部2年の大学生には、授業観察などの経験が少ないこともあり、模擬授業で、児童の反応を想像し、児童になりきることが難しいことが挙げられる。その結果、児童役の学生たちの反応が中途半端で、ある意味学生同士のなれ合い的な雰囲気にもなり得る。

オンデマンドの授業動画では、児童の反応が一切ないからこそ、制作する際に、児童の認識や反応を想定することに、より注意を向けることになるのではないだろうか。表3の感想からも分かるように、本授業履修生の多くは、教科問わず授業づくりの経験が初めての学生であり、現時点では、対面時の模擬授業との比較をすることは難しい。しかし、結果的には、動画を視聴する児童を意識し、その児童の認識に目を向け、配慮の行き届いた内容となっている。

第二に、授業者である自分自身を客観的に捉えている。表3から分かるように、A班、B班の学生の多くが、自身の発声、表情、動作などを客観的に見ようとしている。模擬授業に限らず、ピアノなどの実技の授業でも同様であるが、対面授業において、自分自身の演奏をスマホ等で撮影し、奏でた音色や姿勢などを客観視することを推奨しても、学生から「何度も録画し、確認した」という話はあまり聞かない。このように自分自身を敢えて動画で撮影したり、動画を見直したりすることに躊躇する傾向は少なからずみうけられる。

しかし、複数名が協力しての動画制作では、何度も見直すことが可能となり、「録画したからには、より良いものを創りたい（残したい）」という意志も生まれるであろう。さらに今回は、制作した動画を、附属小の教員及び全受講者が視聴することが事前に周知されていた。他者から評価されることについては対面での模擬授業と同じであるが、録画してアップロードすれば、何度も繰り返し視聴できる状態となる。それらの要因が重なり、自分自身を客観視せざるを得ない状況を創り出したのであろう。そして、学生が自身の表現に向き合い（向き合わざるをえない状態となり）、結果的に彼らの表現力向上に繋がっている。

第三に、対面でも遠隔でも必要な内容について、限られた環境下であっても、ICTを中心としたツールを駆使することにより、対面時と同等、それ以上の効果的な授業場面をつくっている。

たとえば斉唱は、対面授業であれば、その場で班員が一緒に歌うことで実施できる。しかし、表3のA1の記述から分かるように、遠隔での多重録音では、最終的にタイミングが合うことを想定しての伴奏の録音、各自の録音、さらに編集など、膨大な時間がかかる。しかし一方で、本人たちが何度も録画し直せることから、納得のゆく動画素材を完成させることができる。何より、出来上がった動画（音源）を繰り返し使うことが可能となる。実際A班は、7分の動画中の異なる場面で、自分たちの制作した多重録音の音源を4度効果的に使用している。

また、B班のワークシートや児童に動画を提出させる内容からは、瞬時に教員との共有ができずとも、家族との共有を促す発想が学生に生まれていることが分かる。

さらに、A2は「遠隔授業では対面していない分、分かりやすいような工夫を沢山考えましたが、これは対面授業であっても同じことだと感じました」、A4は「知的障害児に対する情報保障や分かりやすさを意識したのですが、結果的にはだれにでもわかりやすく編集できた」と記述している。このことから、学生が、授業動画のみに留まらず、対面授業や対象が異なる指導への応用についても意識できているといえるであろう。

第四に、遠隔で複数名で制作することにより、班員とのコミュニケーションの取り方を意識化できた。

本課題では、学生たちは、打ち合わせを対面で実施することができなかった。しかし、表3の感想からは、遠隔のコミュニケーションで、対面時のような雰囲気やその場の空気感を感じることが難しいことに気づき、その違いに苦慮しながらも、仲間とのコミュニケーションにおいて大切に思うことや、仕事の分担等についても意識できていることが興味深い。

第五に、学校休業時における遠隔授業を、自分事として考えられるようになった。

緊急事態宣言が出された後、具体的にどのように対応するかは各小学校、各地方自治体に委ねられた。その結果、地域間、学校間による格差がかなり生まれた

と考えられる。これまで経験したことのない状況に突然置かれたことによる教育現場の混乱は、教員を目指す学生たちにとっては、決して他人事ではなかったはずである。奈須(2020)が「学びは常に具体的な文脈や状況の中で生じている」と指摘しているように、「自分自身がこの状況下で教員だったら、子どもたちにどのようなことができるのか」を考えることこそが、今まさに現実を感じている文脈と結びつく学びであったといえよう。

表3の記述からは、当初は授業動画を制作することによって不安のあった学生が少なくなかったこと、しかし、自身も大学に通学できない状況下で、複数名の仲間と協働しながら創造力を働かせ、動画撮影、編集のために無料のアプリを柔軟に使いこなし、授業動画を制作していくプロセスを経て得たものを、本人たちが実感している様子がうかがえる。

6 おわりに

本授業でのアンケートでは、「遠隔授業でも良いかなと思う」「遠隔授業の方が自分にとっては良かったと思う」と回答した学生が、「対面授業の方が自分にとっては良かったと思う」よりも圧倒的に多かった。遠隔授業を開始した5月には全く想像できなかった結果である。斎藤(2020)が、オンラインの画面について、「距離感がなくフラット化された分だけ、発言の平等性が担保されるかもしれない」と指摘しているように、周囲からの同調圧力を感じないことを理由として書いている学生もいた。またZoomを用いたグループディスカッションが、対面時のそれよりも話しやすいと言う学生も多くみられた。

対面とは異なる緊張感の中で、学生、教員が協力しての本授業での学びを、アフターコロナにおける授業に於いても活かしていきたいと考える。

謝辞

本授業において、全面的なご協力下さった宮城教育大学附属小学校の先生方、そして、本授業での活動及び感想を含めて掲載することを快諾してくれたA班、B班の学生を含む2020年度前期「音楽科教育法(初等b)」受講生の皆さんに、心から感謝申し上げます。

注

- 1) 筆者にとっての大きなハードルの一つは、遠隔授業で音楽を共有するための方法を模索しなかったことである。対面時には当たり前のようにできていたことができないことが分かった。たとえば、オンラインでは、対面時のようにリアルタイムで同時に歌うことは、ほぼ不可能である。学生たちが同時に発声したとしても、それをすべて同時には出力できず、斉唱、合唱を行うことが難しい。それ以上に、かなりのタイムラグが起きてしまい、たとえばオンライン上で学生が歌うのに合わせて、教員が首を振ったとしても、学生が視聴する画面では半拍ずれるなどしてしまう。また、プロジェクターで投影した動画を学生たちが視聴し、その後に再びその動画について話す、というようなごく普通の流れが、オンラインでは難しい。動画、音の共有は可能であるものの、動画がスムーズに再生されなかったり、画面と音のタイミングがずれてしまったりする。原因は、Wi-Fiの通信環境、一度にアクセスする学生の数などが考えられるそうだが、何度試してもスムーズに再生されることの方が少なく、授業内で活用することは諦めた。動画は事前にYouTubeに限定公開、もしくは非公開の限定（受講生のアカウントからのみ視聴できる）でアップロードし、学生たちが直接アクセスする形にして、できるだけ安定した状態で視聴できるように心がけた。なお、オンラインでの双方向のやり取りでは、学内の許可を得た上で、Zoomを用いることとした。
- 2) ちなみに、文部科学省が全国の公立小学校を対象に行った調査（文部科学省 2020b）によると、臨時休業期間中に「学校が課した家庭における学習の内容」として、同時双方向型オンライン指導を実施したのは8%であるが、「学校独自で動画制作した」は選択肢にない。宮城教育大学附属小は国立であるので回答は行っていないが、「その他」の2%に該当する。
- 3) 宮城教育大学附属小学校（2020a）「新型コロナウイルス感染症拡大予防のための臨時休業期間における本校の取組（5月末まで）― 先が見通せないときでも 子供の学びを ―」を基に作成。
- 4) 附属小の授業動画配信は、基本的に附属小の児童、本学の教員に限って公開されていた。そのため、本授業では、附属小の授業動画をYouTubeの非公開（の限定公開）でアップロードし、さらにそれらを再生リストとしてまとめたURLは限定公開の設定にし、2重のセキュリティをかけた。また、聴覚に障害のある受講生への情報保障として、すべての動画に字幕を付けた。
- 5) 教科書は、附属小で採用している教育芸術社の『小学生のおんがく（音楽）』を用いた。
- 6) 具体的には、メール、もしくはGoogle Driveに共有ドライブを作成し、その中でファイルのやり取りする、打ち合わせには、Google MeetやZoomを用いる、試作動画等はYouTubeに限定公開でアップロードするなどを例示した。
- 7) 字幕は動画を視聴する児童に対してではなく、聴覚に障害のある受講生のためのものである。なお、字幕の付け方については、動画編集ソフト、YouTube上で字幕をつけられることなどを例示した。

文献

- 朝日新聞社・河合塾（2020）『2020年「ひらく 日本の大学」緊急調査―調査結果報告書―』共同調査「ひらく 日本の大学」事務局
- 小原光一他（2020）『小学生のおんがく1』教育芸術社
- 小原光一他（2020）『小学生の音楽2』教育芸術社
- 小原光一他（2020）『小学生の音楽3』教育芸術社
- 斎藤環（2020.8.1）「シリーズ 疫病と人間」毎日新聞朝刊13版 p.14.
- 奈須正裕（2020）『次代の学びを創る知識とワザ』ぎょうせい
- 宮城教育大学附属小学校（2020a）「新型コロナウイルス感染症拡大予防のための臨時休業期間における本校の取組（5月末まで）― 先が見通せないときでも 子供の学びを ―」
http://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/study/R2_torikuminennpyou0611.pdf（2020年8月19日検索）
- 宮城教育大学附属小学校（2020b）「動画配信による授業の実施フローチャート」
<http://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/study/R2%200508furotya-to.pdf>（2020年8月19日検索）
- 文部科学省（2020a）「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況（令和2年6月1日時点）」
https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_6.pdf（2020年8月19日検索）
- 文部科学省（2020b）「新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について（令和2年6月23日時点）」
https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2020年8月29日検索）

（令和2年9月30日受理）

